

マーシャルの経済生物学の意義

山本 堅一（北海道大学・院）

1 はじめに

本報告は、マーシャル（Alfred Marshall: 1842-1924）の経済生物学を、1）アナロジーとしての経済生物学、2）方法論としての経済生物学、3）機械としての人間（経済人）ではなく、生物としての人間（ありのままの人間）を扱うための学問という観点から再考したものである。マーシャル自身がその内容を説明していないため、経済生物学は提示されないままに終わったとされることが多い。しかし、本報告では、経済生物学は、上記の3つの観点で、『経済学原理』（以下『原理』と略記）の中ですでにその概要をみることができるという立場を採る。

これまでも、マーシャルの著作に散りばめられている生物学的なアナロジーに着目し、ダーウィン主義的進化論の視点から解釈しようとする試みはよく見られた。しかし、その多くは、アナロジー以上のものを見いだすことが困難であり、経済生物学は実体なきままに終わったという評価に留まっている（Levine 1989, Thomas 1991 など）。

だが本報告では、経済生物学は、彼が『原理』で展望した有機的成長論と結びつき、彼の経済学の目的と中核を占めるはずであったという立場を採る。これまでもそれは、経済社会を生物有機体のように捉え、有機的な成長過程を描くことを含意しているという解釈が提出されることはあった。しかし、やはりアナロジーを超えるものではないと結論されることが多かった（出口 1979, Niman 1991 など）のだ。だが、有機的成長による貧困問題の解決がマーシャル経済学の目指した重要な目標の一つであることを考えれば、それらの捉え方はいささか軽すぎると思われる。有機的成長論は、経済の進歩と人間の進歩の共進化構造を描く理論である。そこには、アナロジー以上のものが見られ、実体としての経済生物学が、確かに見据えられていたと考えることができる。本報告は、これらの経済生物学に対する先行研究を補い、マーシャルの経済生物学に新たな意義を見いだすことを目的としている。

2 アナロジーとしての経済生物学

最初に述べたとおり、多くの論者が注目するのは、アナロジーとしての生物学である。マーシャルの著作から、生物学的アナロジーを探するのは難しいことではない。主要3著作の中では、『原理』が最も多く、第4編第8章「産業組織」が代表的である。そこでは、ダーウィン、スペンサーの自然選択、分化と統合という視点だけではなく、獲得形質の遺伝に関してや優生学への言及なども見られ、豊富な生物学的アナロジーから産業の組織を捉えようと試みられている（その他、第4編第13章においては、企業の台頭、成長、衰退というライフサイクルを木のそれにたとえている）。

しかしながら、『原理』で取り扱われている生物学的アナロジーには注意が必要である。

経済学の推論の早い段階と物理学の静学の方法との間には、きわめて密接なアナロジーが存在する。しかし、経済学における推論の後の段階と物理学における動学の方法との間には、同様に実用的なアナロジーが存在するだろうか。私はそうは思わない。経済学の後の段階においては、よりよいアナロジーは、物理学からよりも生物学から得られるであろう。

(Pigou 1925, 314)

このようにマーシャルは、生物学からのアナロジーは経済学の後の段階で有用であると主張している。ここで、経済学の後の段階とはいったらうか、という疑問が生じる。これに対してマーシャルは、「経済学の後の段階において、われわれがより生命の状態に近付くとき、他の事情が等しいとする物理学的アナロジーよりも、生物学的アナロジーが選好されるべきである」(*ibid.*, 317)と述べている。また、それゆえ経済学の後の段階においては、「バランスあるいは均衡は、粗野な力学的諸力のそれとしてではなく、活気と衰退の有機的諸力のそれとして考えられる」(*ibid.*, 318)と言及しているところから、後の段階とは、少なくとも静学的均衡論で対応できるよりも後の段階であると判断してよいだろう。

この意味において、マーシャルの『原理』は経済学の後の段階を取り扱ったものとみなすことはできない。『原理』は、マーシャル自身が基礎編と位置付けているように、大部分が後の段階の研究ではない（最後の第 6 編「国民所得の分配」は、後の段階への準備段階であると見なすことはできる）。それなのに、なぜ『原理』には生物学的アナロジーが多くみられるのかという問題は、興味深い問題ではあるが、本報告では取り上げない¹。むしろ、ここでは『原理』に散在する生物学への比喩にのみ着目しては、マーシャルの経済生物学の本質を見ることはできないという点だけ指摘しておこう。

3 方法論としての経済生物学

方法論として経済生物学を考える際には、当時の生物学の状況を考慮し、その方法論を検討することが必要となる。19 世紀後半は、ダーウィンの『種の起源』をはじめとして、

¹ 簡単にでもその理由について触れておいた方がよいだろう。『原理』における生物学的アナロジーは、改訂が重なるにつれ増していった。それには二つの理由が考えられる。ひとつは、『原理』に対するイメージに関するものである。マーシャルの意図とは反対に、『原理』は静学的均衡論のみを扱った研究であるとの評価を受けており、マーシャルを悩ませていた。二つ目は、『原理』完結後に出版するつもりであった進歩に関する著作の実現不可能性の認識である。マーシャルは当初から『原理』を二巻本として完結させる予定であったのだが、その予定は大幅に遅れ、二巻で完結させるという計画も変更されることとなった。『原理』は 1898 年の第 4 版をもって完成とし、以降は続刊に取り組むはずであった。ところが、1898 年から 8 年間の沈黙ののちに出版されたのは、続刊ではなく『原理』の第 5 版であったのだ。この第 5 版は、全体の構成が大きく変更され、最終章も新たに書き加えられた。この変更により、『原理』に経済生物学的な側面が出てきたと見ることができるのだ。すなわち、マーシャルは、1898 年から 1907 年の間に実質的には最終巻を諦めたのではないかと推察できるのである。この点は、別の機会に考察する予定である。

生物進化論に関する研究が多く発表された時期である。その過程で重要な役割を果たしたのが、統計学的手法による遺伝の研究であった。したがって、経済生物学を、ダーウィンの進化論の観点からのみ捉え、「最適者生存の法則」を通じた自然選択の手法を取り入れたものとして把握することは、間違いではないにしても一面的となる危険性がある。当時の生物学の研究を考慮すると、生物学という言葉には多分に遺伝学的要素が含まれていると見なすのが妥当であろう。

もちろん、競争を通じた淘汰のプロセスが、経済的自由を重視するマーシャルの経済学体系において重要であることは確かであり、その意味で自然淘汰の概念を無視することはできない。だが、自然淘汰であれ遺伝法則であれ、統計的研究は、その性格上、全体論的かつ帰納的なものとなる。マーシャルは、方法論争では、演繹的経済学の立場にたって、カニンガムを批判したことは知られているが、マーシャル自身は、帰納と演繹、個体論と全体論の両方を重視していた。例えば、マーシャルは以下のような全体論的視点も持ち合わせていた。

おそらく、初期のイギリス経済学者は、彼らの注意をあまりにも個人の行動の動機に制限しすぎたのだ。しかし、事実経済学者は、他のあらゆる社会科学の研究者のように、社会有機体の一員としての個人に主たる関心がある。大聖堂が、それを作るための石以上のなにものかであるように、人が一連の思考と感情以上のなにものかであるように。社会生活は、個々の成員の生活の集計以上のなにものかであるのだ。

(Marshall 1961, 25)

マーシャルはこのように部分と全体との関係を捉えると同時に、全体としての進化を相互作用による共進化構造として捉えていたのである。すなわち、マーシャルは、人口の増加や知識の蓄積などを含め、*ceteris paribus* の制限が外れる超長期の状態においては、各産業内における各企業の競争は、互いに影響を与えあうことで産業自体の発展を促すと考え、さらには産業同士の相互作用による一国経済への影響も考慮に入れていた。

ただし、方法論として経済生物学を捉える場合、静学均衡論との関係には注意しておかなければならない。周知のように静学均衡論においては、*ceteris paribus* の仮定を置き、方法論的個人主義の立場から理論展開を行っていた。上述したような方法論的全体論は、超長期において展開されるべきものであった。このような方法論を、マーシャル自身が理論においてどの程度展開できたかと言うのは議論の余地がある。

4 人間を取り扱うための経済生物学

マーシャルは 1871-2 年頃、心理学の研究をあきらめ、経済学の研究に生涯を捧げることを決めた。これは、「富の成長ということに関するよりも、生活の質に関して、経済学が実際の緊急性をますます帯びてきた」(Whitaker 1996, II-285) からであった。そして 1873 年、彼は「労働者階級の将来」と題した報告をケンブリッジ大学のリフォーム・クラブで

行った。この報告における一番の関心は、職業における労働者階級と紳士階級の間にある差をなくすることができるだろうかという問題であった。この問題に対し、彼は進歩がその差を徐々に埋めていき、最終的にすべての労働者階級が紳士階級になれるだろうと主張する²。したがって、マーシャルを経済学へと向かわしめた生活の質に関する緊急性とは、主に労働者階級の生活態度を問題にしたものと考えられる。マーシャルによれば、貧困な労働者階級は、毎日長時間に及ぶ肉体労働で疲れてしまい、教養を身につけたり、家族と一緒に過ごすために余暇の時間を使用することができない。その代りに酒を飲んで騒ぐなどの一時的な快楽に走りがちであり、それゆえ貧困からの脱却もできないのだという。しかし同時に彼は、そのような態度に陥ってしまう原因は、貧困な状態の彼らにあるのではなく、貧困そのものにあると考えたのである。それゆえいかにイギリスの経済が成長しようとも、彼らが貧困である以上、黙って見ているは貧困から抜け出すことはできないと見なしたのだ。このような考え方がマーシャルの経済学体系には一貫している。

マーシャルの貧困の解消に対する見解は、以下の一文がよく示している。

一部は生物学的研究の示唆を通じて、性格の形成における環境の影響は、社会科学において一般に支配的な事実として認識されている現代、...経済学者は人間の進歩の可能性に対し、ますます大きな希望を持つようになった。

(Marshall 1961, 48)

このように、マーシャルは貧困問題の解消を人間の進歩に求めたのである。人間に進歩の可能性を認め、経済学においてもその点を認識したうえで理論を組み立てることの重要性は、リカードウら 19 世紀のイギリス経済学者が見逃していた最大のものであるという。

5 それぞれの関係とまとめ

以上みてきたように、マーシャルのいう経済生物学には、3 つの側面からの実体が含意されていたとみなすことができる。最後にこれら 3 つの関係と、経済生物学の持つ意義を考えてみたい。最初に述べたように、経済生物学はメッカとして目指すべきものであるとされたが、『原理』においては、すべての側面が具体的に展開されているわけではない。『原理』では、経済生物学のアナロジーとしての側面が主に見られる。しかし、おそらく『原理』で現れている生物学アナロジーは、経済生物学を構成するはずであったアナロジーのすべてではないだろう。また、それは、力学的経済学に代替できるほど十分なものではなかった。例えば、『原理』第 4 編第 8 章「産業組織」に見られる豊富な生物学的アナロジー

² マーシャルのここでの労働者階級と紳士階級の区別の仕方は独特であるので注意が必要である。彼は労働がその労働者に与える効果をもって区別する。すなわち、ある人の労働が、その人に教養や洗練さを与えるものならば紳士階級であり、粗野で粗暴にするような労働であれば、労働者階級に属するというものである。紳士階級になれるだろうという主張は、あくまでも職業に関しての紳士階級であることも併せて注意が必要である。

は、産業組織を生物有機体のように捉えることができるということを示唆している。しかし、理論的分析には代表的企業という概念が使用され、その生物学的試みは理論の中には現れてない。

しかし、本報告では、経済生物学をただのアナロジーとしては解釈していない。マーシャルがなぜ生物学という名前を使用したのかを知るためには、当時の生物学の状況を考察する必要があった。その生物学は、進化論も当然含まれるが、遺伝学—と言っても、19世紀後半はまだ遺伝子の研究ではなく統計学的手法を中心とした帰納的研究—をも含むものである。

さらにマーシャルは、スペンサー同様、社会そのものを有機体として捉えた。それゆえ、経済は個々の部分の力学的関係にのみ焦点を当てる静学的均衡論では理解できないとされた。マーシャルは『原理』の中で、有機体としての社会についての何らかの理論を展開しているわけではないが、『原理』第6編や、それ以降の2著作に見られる歴史的視点からの社会有機体の進歩の分析は、社会有機体へのアプローチの特徴を示唆しているといえる。それは、歴史的時間を考慮し、部分と全体を考慮した説明方法である。このように考えれば、マーシャル自身は、経済生物学の方法論に対するイメージを確かに持っていたと考えることができる。

さらにマーシャルの有機体観は、産業組織のみにとどまるものではなかった。なぜなら、彼が経済学の目的として捉えた貧困問題の解消を、人間の進歩を通じて解決しなければならないと考えたからである。そこで、経済学において人間性の可変性を考慮に入れ、ありのままの人間を取り扱うために、経済生物学が必要だったのである。

これら3つの側面を総合して考えると、マーシャルの経済生物学は、確かに経済学の後の段階になって考慮すべきものではあるが、『原理』の中でもその方法は至る所に示唆されており、従来考えられていたほど曖昧なものではないことがわかる。マーシャルが、静学的均衡論から後の段階までの連続性を強調したことを考えても、たとえ詳細な理論は展開されなかったことを認めたとしても、静学的均衡論を基に経済学の序論を考察する際においても、常に経済生物学を見据えていたことは明らかであろう。経済生物学の3つの側面は、どれをとっても彼の経済学体系においては重要な位置を占めるのである³。

マーシャルのように経済学の中で人間の進歩を扱うことは、現在でも意味を持つのではないか。マーシャルの経済生物学の中で仮定される人間像は、おそらく合理的経済人とは

³ 経済生物学とピグーとの関係について簡単に触れておこう。ピグーは、労働者の生活環境の改善が、その仕事の結果を高い賃金に見合うものにするということを指摘し、そこに機能的適応という生物学的法則が働いていると見なしている点で、マーシャルの経済生物学を継承したといえるかもしれない。しかしながら、マーシャルが経済生物学に基づき、有機的成長論を追及していった先に、ピグーのような厚生経済学に辿りつくかどうかは議論の余地があるだろう。マーシャルの経済生物学との関係までは言及していないが、ピグーの経済生物学への言及については本郷（1997）で触れられている。

かけ離れたものとなったであろう。合理的経済人は、周辺から独立し、自立的・自律的に意志決定をすることが仮定されている。しかし、社会を有機体として捉え、人間をその社会に位置づけられた存在と考え、その思考や行動を全体との関係の中で考察するという考え方は、現在の経済学を見直す上でも重要な視点を提供してくれる。

また、マーシャルは貧困の解決が人間の進歩とそれに伴う経済成長によって解決されると述べたが、超長期的に見れば、現代社会が直面している多くの問題が、同じ方法で解決できるかもしれない。マーシャルが目指した経済生物学を探ることは、このような現代的な問題にも示唆することが多いだろう。

* フルペーパーは当日配布しますが、以下の URL からダウンロード可能にする予定です。
<http://cc.econ.hokudai.ac.jp/~yamamoto/shet/shet.html>

参考文献（ここで名前を挙げているもののみ）

- Chasse, J. D. 1984. "Marshall, the Human Agent and Economic Growth: Wants and Activities Revisited", *History of Political Economy*, Vol. 16, No. 3: 381-404. Reprinted in Wood ed. 1996, Vol. VI: 308-331.
- Levine, A. L. 1983. "Marshall's *Principles* and the "Biological Viewpoint": A Reconsideration", *Manchester School of Economics and Social Studies*, Vol. 51, No. 3: 276-293. Reprinted in Wood ed. 1996, Vol. VI: 224-240.
- Marshall, A. 1961. *The Principles of Economics*, 9th ed. London, Macmillan, Vol. I. 馬場啓之助訳『経済学原理』東洋経済新報社，1965-1967。
- Pigou, A. C. 1925. *Memorials of Alfred Marshall*, London, Macmillan, 永澤越郎訳『マーシャル経済論文集』岩波ブックサービスセンター，1991。
- Moss, L. 1990. "Evolutionary Change and Marshall's Abandoned Second Volume", *economie appliquée*, tome XLIII: 85-98.
- Niman, N. B. 1991. "Biological analogies in Marshall's work", *Journal of the History of Economic Thought*, 13: 19-36.
- Thomas, B. 1991. "Alfred Marshall on economic biology", *Review of Political Economy*, 3.1: 1-14.
- Whitaker, J. K. 1996. *The Correspondence of Alfred Marshall, Economist*, Vol. I-III, Cambridge University Press.
- Wood, J. C. ed. 1996. *Alfred Marshall: critical assessments: Second series*, London, Routledge, Vol. V-VIII.
- 出口康博，1979。「マーシャルの『経済生物学』と有機的類推」『白鷺論叢』，12：21-32。
- 本郷亮，1997。「A.C.ピグーの社会主義論：『厚生経済学』形成史との関連において」『関西学院経済学研究』Vol. 28。